

透析管理システムの普及を望む

前波 輝彦*

透析療法は、医師、看護師、臨床工学技士などさまざまな透析スタッフの力で支えられている。透析現場は慢性的なスタッフ不足状態であり、とくに看護師不足が顕著である。この20年で維持透析患者の平均年齢は8.1歳、導入患者は6.9歳高齢化し、各々69.7、71.1歳となり、透析は高齢者医療といえる。患者の自立度低下、フットケア、運動ケア、透析低血圧などの対処が枚挙にいとまがないほど増加している。スタッフの手がいくらあっても足りない。その人手不足を少しでも解消する方法として、透析治療をサポートするコンピュータ透析管理システムがあり、スタッフの労力削減から透析治療の質の向上まで多くの利点を有しているが、その導入は全国40%程度にすぎない。

筆者はこのシステムに早くから着目し、20年前に導入した。最近のコロナ禍では施設の安全を担保するため、顔認証機能による体温測定とともに発熱患者の透析室への入室を防ぎ、入室時の患者認証をシステムに送信することを考案、実現している。モニタリング機能では、透析中の異常検出や警報の発信で早期に問題を発見し、適切な対応により透析の安全性や正確性が確保でき、このシステム導入後、インシデント発生が激減している。また、患者の透析データを集約・分析することで治療効果のトレンドを追うことや予後の予測が可能になり、より適切な治療計画を立案できる。このように透析情報への容易なアクセスにより、透析スタッフとともに患者は透析について理解を深め治療

* あさお会あさおクリニック

に対する意欲を高めることができる。さらに、ベッド管理機能から器材や注射のスケジュールを効率化するため、スタッフの労力が削減し、医療の効率化を図る利点もある。

一方、システムにはいくつかの課題も存在する。たとえば、その導入や運用には時間と費用がかかるため、施設の予算やリソースに影響を与える。また、システム導入に伴う新たな手法や知識の習得が必要になり、スタッフの教育に手間や時間がかかる。筆者はスタッフに、「スマホ（スマートフォン）でメールができるならば次第に慣れるよ」と言い続け、事実そのとおりであった。

透析管理システムの活用により、透析医療の効率化や安全性の向上、治療の質の向上、そしてスタッフの労力削減による本来の患者ケアの実施などが確信できる。

透析管理システムはたくさんのメリットをもったシステムであり、全ての透析施設での導入が望まれる。普及のためには、システム提供会社に費用の低減を望む次第である。